

## 謝靈運の詩表現の一特色

—『楚辞』との関連を中心に—

鈴 木 敏 雄

劉宋の詩人謝靈運（三八五——四三三）は、きわめて修辭の盛んな時代を背景に、彼独自の表現を持つ詩の世界を構築した。いま、彼の修辭技巧の中で特に典故表現について見ると、これまでに指摘されているような『莊子』を中心として『老子』『周易』を含む、所謂「三玄」による表現の外に、『楚辞』による表現が多く見られる。試みに『文選』所載の謝靈運詩に付された李善注によりその数値を調べると、同時代の顔延之（三八四——四五六）や鮑照（四〇五——四六六）の、約二倍近くの割合で用いられていることが分かる。これは謝靈運が適所に頻繁に用いる『莊子』の使用率よりもさらに高く、彼の詩の出典中では、この『楚辞』が最も多いことになる。そして、顔延之や鮑照が『毛詩』や『漢書』などの経書・史書類を多用するのに較べ、やはり特別な印象を受ける。一体、謝靈運は何故このように『楚辞』を多用したのであるか。この疑点に迫るため、拙稿ではこの詩人の『楚辞』を用いた表現形式、およびそこに込められた意味について論述を試みたい。方法としては、対象を明確に把握したいがため、他の詩人（齊の謝朓）および他の出典（「三玄」との比較という形式をとった。論点を以下に掲げると次のごとくである。

一、謝朓に見られる『楚辞』を用いた表現についての概略。

二、謝靈運に見られる『楚辞』を用いた表現について、謝朓の場合との比較。

三、謝靈運に見られる『莊子』（「三玄」へと敷衍）を用いた表現と、二で述べた『楚辞』の場合との形式、内容面の比較。

## 四、謝靈運に見られる『楚辞』への共感。

## 一

謝靈運と同時代にあって、彼以外に『楚辞』を多用した詩人を求めると、時代は少し下るが、蕭齊に同族の後輩の謝朓（四六四——四九九）がいる。彼は謝靈運の詩から多大な影響を受け、更にそれを発展させて、謝靈運の最盛期より数え、約七十年後にその詩名を挙げる。そこでこの詩人について、謝靈運らと同基準のもとにその典故表現を調べてみるに、最も多用するのは『毛詩』で、次にすぐ『楚辞』が来る。この点から考えると、謝朓も、少なくとも数量的には『楚辞』からかなり多くの語句を借りていることになる。したがって、比較の対象としてよかろうと思われるので、以下にはまず、「二謝」の『楚辞』を用いた表現の簡単な対比を試み、ついで謝靈運に関する論を展開してゆきたい。

謝朓の「和伏武昌登孫權故城」詩（『文選』卷三十）の最後の四句、

幸籍芳音多 幸ひに芳音の多きに籍り

承風采餘絢 風を承けて餘絢を采る

于役儻有期 于役 儻し期有らば

鄂渚同遊衍 鄂渚に同に遊衍せん

を見ると、例えば傍点で指摘した「承風」および「鄂渚」が、李善によれば、それぞれ遠遊の、

聞赤松之清塵兮、願承風乎遺則。

おわび九章・涉江の、

乘鄂渚、而反顧兮、歎秋冬之緒風。

より出るとされる。遠遊の二句「赤松の清塵を聞き、願はくは風を遺則に承けん」は、仙人赤松の風を慕うもので、遊仙の気持が述べられている。また、涉江の「鄂渚に乗じて反顧すれば、ああ秋冬の緒風」には、屈原の孤独であり

ながら孤高とも言える姿がある。これらの内容を踏まえた語を、謝朓は彼の詩でどのように用いているであろうか。謝朓はこれらの語を用いて、武昌の太守・伏曼容——別に道家的な思想を体している人物ではない——の芳しい「風を承け」ること、および彼に因む湖北省武昌の西の地としての「鄂渚」を、実は言っているに過ぎない。したがってこのような語は、原典の背景までも喚起させるものではなく、詩人の当面する事態にのみ即した措辞であると考えられる。

次に「和徐都曹出新亭渚」詩（『文選』卷三十）、

宛洛佳遨遊 宛洛 遨遊するに佳く

春色滿皇州 春色 皇州に満つ

結軫青郊路 軫を青郊の路に結らし

迴瞰蒼江流 廻かに蒼江の流れを瞰る

日華川上動 日華 川上に動き

風光草際浮 風光 草際に浮かぶ

桃李成蹊徑 桃李 蹊徑を成し

桑榆陰道周 桑榆 道周を陰おほふ

東都已俶載 東都 已ことに載はじを俶む

言歸望綠疇 言ことに歸りて綠疇を望まん

の「桑榆」という語は、九歎・怨思の、

孤雌吟於高墉兮、鳴鳩棲於桑榆。

より出るとされる。これを謝朓の詩に即して見ると、特に孤独な「鳴鳩」の棲まうような気高い木としての「桑榆」を指さない。やはり前詩の二語と同様であると考えられる。それに対し、「結軫」や、また「新亭渚別范零陵」詩

（『文選』卷二十）、

洞庭張楽地 洞庭は楽を張るの地

瀟湘帝子游 瀟湘 帝子遊ぶ

雲去蒼梧野 雲は去る蒼梧の野

水還江漢流 水は還る江漢の流れ

停驂我悵望 驂を停めて我は悵望し

輟棹子夷猶 棹を輟めて子は夷猶す

広平聴方籍 広平 聴 方に籍しき

茂陵将見求 茂陵 将に求められんとす

心事俱已矣 心事 俱に已んぬるかな

江上徒離憂 江上 徒らに憂ひに離る

の「徒離憂」という語などは、それぞれ九歎・遠遊の、

結、余軫於西山兮、横飛谷以南征。

および、九歌・山鬼の、

風颯颯兮木蕭蕭、思公子兮徒離憂。

より出、比較的原典を踏まえた語で、典故を持つ。ただ、これ以上詳述するまでもなく、このような語句、あるいは典故の用い方は、『楚辞』を用いている点で使用率がかなり高い以外は、別に謝朓の特色として採り挙げるほどのものではなく、一般にどの詩人にも見られる現象であると言える。

ところで再び今の「新亭渚別范零陵」詩全体を見わたすと、傍点で指摘した語句の外に、「洞庭」や「蒼梧」などの語も『楚辞』に見えるものであり、五句目の「停驂我悵望」などの表現も『楚辞』的な色彩が濃く、一篇としては明らかに『楚辞』を意識している。しかし一句一句は『楚辞』に何らかの共感を示そうとするものではなく、自らの詩に、ある種の雰囲気醸す手段として借りたもので、すべて謝朓独自の表現となっている。この点から見れば、ど

ここに『楚辞』的な色合を残しながらも、原典にそれほど密着しないのが、謝朓の表現の一特色であると考えられる。そのような表現の顕著なものとして、前掲の「和徐都曹出新亭渚」詩の五句・六句目「日華川上動、風光草際浮」が挙げられる。この句は招魂の、

光風転蕙、汎崇蘭些。

により、さらに王逸注の、

光風謂日出而風、草木有光色也。

をも介していながら、実はそのいずれにも捉われていない。すなわち、『楚辞』特有の「蕙」や「蘭」を排除して「草際」とし、川水への日の照り返しを前面に出して、これに「風光」を添えるという謝朓独特の清新な表現がなされ、後世に推称されている。<sup>⑧</sup>このような句造りこそ、謝朓の得意とするところであると考えられる。

以上のように謝朓の『楚辞』による表現には、原典に密着し、その背景を十分に踏まえたものは殆ど無く、単なる同語としての借用から、むしろ彼独特の詩情を描くために用いる方向への展開が見られる。

## 二

さて、以上のような謝朓の表現に対し、謝靈運の場合はと言えば、やはり謝朓の詩に指摘したような、原典に殆ど密着しない表現もいくつかあるが、むしろ彼の特色は、次に挙げる例の中に見ることができ。以下にそれを述べてゆきたいが、その際、背後の意味を捉える必要上、当時一般に行なわれていたと考えられる王逸『楚辞章句』による注をも、随時併せ見る。

はじめに「石壁精舍還湖中作」詩（『文選』卷二十二）の二句に、その一斑を窺えば、

……

……

清暉能娛人、清暉是能く人を娛しましめ

游子憺忘歸、游子は憺として帰るを忘る

の傍点部、九歌・東君の、

羌声色兮娛人、觀者憺兮忘歸。

より出、この部分に王逸は、

言日色光明、且燿四方、人觀見之、莫不娛樂、憺然意安、而忘歸也。

と注する。ここの東君に言う「声色」は太陽神「東君」のもので、太陽は人格化され擬人化されている。それを謝靈運の詩では、王逸注を通し、実景としての陽光を感じたままに「清暉」と言う。しかしその際、太陽に因み、二句に亘って原典の語「娛人」、「憺・忘歸」をもそのまま借りる。詩想は概ね詩人自身のものでありながら、表現は原典のままに近い。まずこの事が、謝靈運の『楚辭』を用いた表現全般に言える。次の永嘉の南亭での作、「遊南亭」詩（『文選』巻二十二）にも、やはりそれが表われている。

沢蘭漸被徑、

芙蓉始發池

未厭青春好、

已覩朱明移

戚戚感物歎

星星白髮垂

……

これは時の推移の中で衰え老いゆく我が身を、「物に感じて歎く」というもので、それぞれ招魂の、

朱明承夜兮、時不可以淹。皋蘭被徑兮、斯路漸

および、

芙蓉始發、雜芰荷些。

大招の、

青春受謝、白日昭只。

九章・悲回風の、

愁鬱鬱之無快兮、居戚戚而不可解。

を出典とする。この時、『楚辞』では、例えば招魂の「蘭被徑」の句について、王逸は、

言賢人久処山野、君不事用、亦將隕顛也。

と言うが、謝靈運の詩では目に入った草木の姿をそのまま述べるにとどまり、王逸注にあるような含みは直接には表面化しない。しかしそれでも表現は原典を踏襲する。つまり、以上の二首の詩に見た例は、いずれも目に触れた山水自然の風物を表現する手段として『楚辞』と共通の語句を用い、それにその時の詩人なりの感情を寄せながら、ほぼ原典のままの表現を借りる。この点に、謝靈運の『楚辞』による表現全般についての一特色が指摘できる。

次の「東山望海」詩（『芸文類聚』卷二十八）も山水自然の捉え方は前の二例と同じで、

開春猷初歲、開春 初歳を猷じ

白日出悠悠、白日出でて悠々たり

蕩志將愉樂、志を蕩はしままにして將に愉樂せんとし

瞰海庶忘憂、海を瞰くて憂うれひを忘れんことを庶ふ

策馬步蘭皋、馬まに策さうつて蘭皋らんこうを歩あませ

縹控息椒丘、縹たつ控なへて椒丘けうきうに息ふ

采蕙遵大薄、蕙わいを采ありて大薄たいはくに遵したがひ

攀若履長洲、若わくを攀ありて長洲ちやうしゅうを履ふむ

……

……

と言うとき、例えば五句・六句目「策馬步蘭皋、縹控息椒丘」は、離騷の、

步余馬於蘭皋兮、馳椒丘且焉止息。

に基づき、王逸は「君命を須まつ」こととする。謝靈運においては、背後の含意が王逸注に言うものに近いかどうかは、即座に判断できないにしても、原典と共通する語句による山水跋涉の行動描写のうち、何らかの感慨を述べるという表現がなされる。

また、以上の二句以外の他の部分は、九章・思美人の、

開春發歲兮、白日出之悠悠。吾將蕩志而愉樂兮、遵江夏以娛憂。擘大薄之芳茝兮、搴長洲之宿莽。

によるが、ここに謝靈運の、『楚辭』を用いた表現についての、形式上のより顕著な特色を見ることが出来る。すでに一見して明らかのように、それは、単に『楚辭』の語を多用するというだけではなく、『楚辭』の句を二句から数句に亘って、押韻などの制約部分は除き、ほぼ原典のままを自分の詩句に採用する点にある。この特色によって生ずる表現上の効果は大きい。そこで以下に、このような形式上の特色に注目しつつ、それがどのような内容面の特色をもたらし、表現効果を生んでいるかを併せ見たい。

いまもう一度、この「東山望海」詩の最後の二句「采薏遵大薄、搴若履長洲」を見ると、思美人の「大薄の芳茝を擘り、長洲の宿莽を搴る」の部分に借り、王逸によれば、

欲援芳茝、以為佩也。

とあり、また、

采取香草、用飾己也。

と言われる。謝靈運は『楚辭』の語句を借りることで、たびたびこのような美人香草の喩えを用いる。つまり、この美人香草による詠が、内容面につながるさらなる一特色であると言える。また、多少の飛躍があるかも知れないが、ここには老莊流の処世の態度を述べる時と、一脈相通するものがあるように思う。この点は追って検証しながら述べることとし、まず、美人香草の詠が老莊流の処世態度と相通するに至るまでの過程を、順次述べたい。



謝靈運には、永嘉の太守時代、衙署の西に在る上戍浦の石鼓山に登った時の作に、「登上戍石鼓山」詩（『詩紀』卷四十七）がある。

旅人心長久、旅人 心は長久にして  
憂憂自相接、憂ひと憂ひと自ら相接す  
故郷路遙遠、故郷 路 遙遠にして  
川陸不可涉、川陸 渉るべからず  
汨汨莫与娛、汨汨として与に娛しむ莫く  
発春托登躡、発春 登躡するに托す

……

白芷競新茗、白芷は新茗を競ひ

緑蘋齊初葉、緑蘋は初葉を齊ふ

摘芳芳靡諼、芳を摘めども芳は諼れさすこと靡く

愉楽楽不變、愉楽すれども楽しみは變げさせず

佳期緬無像、佳期は緬かにして像無く

騁望誰云愜、望を騁すれども誰か愜しと云はん

この詩も初めの六句および省略部分に続く次の二句が、それぞれ九章・哀郢の、  
心不怡之長久兮、憂与愁其相接。惟郢路之遼遠兮、江与夏之不可涉。

および、招魂の、

献歲発春兮、汨吾南征。菴蘋齊葉兮、白芷生。

の語句を、ほぼそのまま用いている。その内容は、『楚辭』では初めの哀郢の「心は怡しまざることを之れ長久にして」以下に、王逸が、

言已念楚国将墟、心常含戚、憂愁相統、無有解也。

と言うように、憂国の情があらわれている。しかし謝靈運の場合、「故郷」への路は会稽の始寧墅を指し、直接には隠退の念いへつながるもので、『楚辞』のような憂国の情は無い。では、表現をこれ程まで原典に近づけておきながら、その第一の主要テーマである懷君憂国の情を内容に盛り込むのでないのなら、一体何を借りようとしたのか。それがこの詩の最後の二句にあらわれる。

最後の二句「佳期緬無像、騁望誰云愜」は、九歌・湘夫人の、

白蘋兮騁望、与佳期兮夕張。

による。王逸は、

言己願以始秋、蘋草初生、平望之時、修設祭具、夕早灑掃、張施帷張、与夫人期、歆饗之也。

と言い、湘夫人と会うことに期待をかける意にとっている。すでに前述の通り、謝靈運の詩もこの意味を襲い、やはり湘夫人のような人物、つまり美人を、自分の本心の理解者に見立てる。所謂「賞心」の友にも通ずる。そして、この詠を常套の表現内容としながら、常に直接的な強い否定を伴うことを、特色として持っている。またさらに、『楚辞』では辞賦形体の長い敷陳の末に否定の感情が表われるが、謝靈運においては、五言詩という形体と相俟って直截に否定語が前面に出るところに、より強い悲哀の情が感じられる。それは次の「石門巖上宿」詩（『芸文類聚』卷八）以下に明らかに見える。これを「美人」に代表されるような、高潔なる者への思慕と捉えたい。謝靈運の『楚辞』による表現内容ではこの点が最も顕著で、そこには高潔なる者への思慕と捉えたい。謝靈運の『楚辞』にうとする詩人の姿がある。「石門巖上宿」詩の、

朝、牽、苑、中、蘭、朝に牽る苑中の蘭

畏、彼、霜、下、歇、畏らくは彼霜下に歇きなん

……

美、人、竟、不、来、美人 竟に来らず

陽阿徒晞髮、陽阿に徒らに髪を晞かす

という冒頭および結句の部分は、それぞれ離騒の、

朝、牽、阨之木蘭兮（……惟草木之零落兮、恐美人遲暮）。

および九歌・小司命の、

与女沐兮咸池、晞女髮兮陽之阿。望美人兮未來、臨風悅兮浩歌。

による。謝靈運は、「朝牽苑中蘭」という行為により、わが身の潔白を述べて、思慕する人物と面会する準備をする。しかしそれは、常に次句の「畏彼霜下歇」という発言に象徴される、先行きの一抹の不安がつきまとい、結局は「美人竟不来、陽阿徒晞髮」ということになる。同時にまた、前の「登上戍石鼓山」詩でも触れたように、ここにもやはり直截的な強い否定の情が見られる。以下に示す例も同様のパターンの繰り返しで、これらは政治上の不遇から来るものかも知れない。<sup>④</sup>

そして「美人」とは、その時の詩人自身を慰藉できる実在人物を言うものと考えられないこともない。例えば「南樓中望所遲客」詩（『文選』卷三十）などは、詩題から見ても対象人物がはっきりしているようにとれる。

杳杳日西頹、杳々として日は西に頹れ

漫漫長路迫、漫々として長き路は迫る

登樓為誰思、樓に登りて誰が為にか思ふ

臨江遲來客、江に臨んで来る客を遅つ

……

……

孟夏非長夜、孟夏は長夜に非ざるも

晦明如歲隔、晦明は歳の隔たるがごとし

瑤華未堪折、瑤華は未だ折るに堪へざるも

蘭若已屢摘、蘭若は已に屢々摘めり

路阻、莫贈問 路阻まれて贈問する莫し

云何慰離析 云何ぞ離析を慰めん

……

三句・四句目「登樓為誰思、臨江遲來客」は、『楚辭』による表現の間にあつて、確かに対象となる人物がおり、その人物を遅つかのようにならぬように詠まれている。しかしこの詩人の常としてそれは明言されず、しかもこういった人物に該当するものも實際謝靈運の周辺には見当りそうにない。そしてさらにこの延長として後半の表現を見ると、そのまま『楚辭』多用の部分に融合され、それぞれ九章・抽思の、

望孟夏之短夜兮、何晦明之若歲。

九歌・大司命の、

折疏麻兮瑤華、將以遺兮離居。

同じく九歌・山鬼の、

被石蘭兮帶杜衡、折芳馨兮遺所思。

および九章・思美人の、

媒絕路阻、言不可結而貽。

などの出典より導き出される「美人」に代表されるような、高潔なる者への思慕に変わってゆく。とすれば、詩の構想から順当に考えて、彼には、到底及ぶべくもない高潔なる人物を想定し、その人物を思慕し、そしてその思慕が容れられないためにできる落差から悲哀感を生ずる、という発想なり手法が、意識の内外にあったのではないだろうか。

例えば次の「石門新宮所住四面高山廻溪石瀨茂林脩竹」詩（『文選』卷三十）は、それを顕著に物語る。

……

嫋嫋秋風過 嫋々として秋風は過ぎ

萋萋春草繁 萋々として春草は繁し

美人遊不還 美人 遊びて還らず  
佳期何繇敦 佳期 何に繇りてか敦うせん

芳塵凝瑤席 芳塵は瑤席に凝り

清醕滿金尊 清醕は金尊に満てり

洞庭空波瀾 洞庭 空しく波瀾あり

桂枝徒攀翻 桂枝 徒らに攀翻す

……

……

この詩はそれぞれ九歌・湘夫人の、

嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下。……与佳期兮夕張。

招隱士の、

……攀援桂枝兮聊淹留。王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋。

および九歌・東皇太一の、

瑤席兮玉璫、……奠桂酒兮椒漿。

によるが、詩の「美人」以下六句について、清の方東樹はその著『昭昧詹言』巻五に、

「美人」の六句は、同に賞する無きを言ふ。……「美人遊不還」の一段は、幽憂・怨慕・淒涼の意にして、全て

屈子の餘韻を得。吾嘗て前藻の意を商榷するを以て之に況ぶるに、且く為に低徊す。況んや曠遠の遐思を懐く者に於てをや。

と言い、この六句が「幽憂」「怨慕」「淒涼」の意をもつことで、全く屈原の余韻を得、彼自身も原典の『楚辞』とひきくらべてみて思いに耽ったくらいであるから、「曠遠」な思いを懐く謝靈運においてはなおさらであったろう、と感慨を述べる。ここに方東樹も言うように、実在しない「美人」への思慕に借りた表現から、「幽憂」などのさまざまの形の悲哀感が生み出される、という構想が展開される。そしてこの「美人」の表現に托された悲哀感は、やがて

対象を明らかな空想上の人物、例えば、「從斤竹澗越嶺溪行」詩（『文選』卷二十二）、

……

想見山阿人、想ひ見る山阿の人

薛蘿若在眼、薛蘿 眼に在るがごとし

握蘭勤徒結、蘭を握るも勤をば徒らに結び

折麻心莫展、麻を折るも心をば展ぶる莫し

に見える「山阿人」や、「入華子崗是麻源第三谷」詩（『文選』卷二十六）、

南州実炎徳、南州は実に炎徳あり

桂樹陵寒山、桂樹は寒山を陵ぐ

……

羽人絶髣髴、羽人 絶えて髣髴と

丹丘徒空筌、丹丘徒らに空筌なるのみ

……

に見える「羽人」等に向けてゆくことになる。

この詩は、九歌・山鬼の、

若有人兮山之阿、被薛荔兮带女蘿。

および、

被石蘭兮带杜衡、折芳馨兮遺所思。（既出）

と、九章・思美人の、

媒絶路阻、言不可结而胎。（既出）

による。ここの「山阿」の「人」は、王逸によれば、

言山鬼仿佛、若人見於山之阿、被薛荔之衣、以兔絲為帶也。薛荔・兔絲皆無根、緣物而生、山鬼亦晻忽無形、故衣之以為飾也。

というような存在「山鬼」、すなわち山の精を指し、また「入華子崗是麻源第三谷」詩は、遠遊の、

嘉南州之炎德兮、麗桂樹之冬榮。

および、

仍羽人於丹丘兮、留不死之旧郷。

により、「丹丘」の「羽人」とは、

因就衆仙於明光也。丹丘昼夜常明也。九懷日、夕宿乎明光、明光即丹丘也。山海經言、有羽人之国、不死之民。と王逸も言うように、仙境に棲まう不死の存在、すなわち仙人を指す。以上の二例から考えると、「美人」への思慕はやがては「山鬼」のような山の精や、「羽人」のような仙人への思慕にまで広がる。そしてここに、『楚辞』の遠遊篇を出典に用いていることから、老荘思想へとつながる考え方を見ることが出来る。無論、『楚辞』を用いる段階では、「羽人絶髮鬣、丹丘徒空筌」と言って、「絶」「徒」という語により、直接のつながりは抑えられているが。

以上、謝靈運の『楚辞』による表現は、謝朓のそれとは異なって、原典の語句をほぼそのまま踏襲しており、特にその美人香草の表現には、実際属目した山水の風物よりその香草を想起し、それはやがて美人への思慕となり、さらに山の精や仙人を思うようにまで至る、という構想がその背景として存在するように思われる。そこで、この考え方が向うところとして、次に老荘思想、つまり『老子』『莊子』『周易』という所謂「三玄」による表現との関連性をも見る必要が出て来る。

### 三

当初に触れたが、『莊子』に限れば、これは謝靈運の出典中で『楚辞』について二番目に多用される。これに『周

易』および『老子』によるものを加え、所謂「三玄」とした場合、それは『楚辞』によるものよりも、数的には多くなる。そこでいま、これを前述の『楚辞』による表現と較べてみたい。

まず形式面では、「三玄」による表現には、出典を同じくする語が数句に亘って見られることは、一、二の例外を除いて殆どない。専ら老荘流の典故を持つ語が詩の随所に散見できるとか、目立つものでも一、二句に襲用される程度にとどまる。ただ、謝朓に見られる「三玄」に較べると、謝靈運の場合は、原典の表現を踏襲し、単なる語句の借用にとどまらないものが圧倒的に多い。

例えば、「摂生」という語が両者ともに見られるが、これに関して比較対照してみると、まず謝朓の「蒲生行」

……

摂生各有命 生をやしなふには各々命有り

豈云智与力 豈に智と力とを云はんや

……

とあり、この語は『老子』五十章に、

蓋聞善摂生者、陸行不遇兕虎、入軍不被甲兵。兕無所投其角、虎無所措其爪、兵無所容其刃。……

とあるところから出る。『老子』のこの部分は、王弼が「摂生者」について、

器之害者莫甚乎戈兵、獸之害者莫甚乎兕虎。而令兵戈無所容其鋒刃、虎兕無所措其爪角、斯誠不以欲累其身者也。と言うように、「誠に欲を以て其の身を累はさざる者なり」という境地に身をおく者について述べている。これを謝朓の詩に即して考えると、すでに「摂生」を既成の熟語として捉えて、それをそのまま借り、一切を運命に任せること、「智」と「力」とに寄らず無為であることを、一篇の均整のとれた表現に練りなおして詠み込んでいる。「奉和隋王殿下」詩の、

上善叶淵心 上善は淵心に叶ひ



止川測動性 止川は動性を測る

や、「始之宣城郡」詩の、

烹鮮止貪競 烹鮮もて貪競するを止め

共治屬廉恥 共に治めて廉恥に属かん

などの傍点部はみな「三玄」を出典とする語であるが、思想を咀嚼しながら用いるのではなく、あくまで既成の熟語として扱う。このような表現の仕方が謝朓には多く見られ、それがむしろ一般的であると思われる。

では、謝靈運においてはどうかであろうか。「撰生」にかえてみると、仏教的な理解も同時にとり入れられていると考えられるが、「過瞿溪石室飯僧」詩（『芸文類聚』卷七十六）に、

……

忘懷狎鷗鯢 懷ひを忘るれば鷗鯢狎れ

撰生馴兕虎 生を撰へば兕虎馴る

……

と言い、俗念を忘れて無欲であれば「兕虎」もなつき、無害であることを述べる。その際、単に「撰生」だけを採らず、謝朓とはわずかな違いかも知れないが原典の「兕虎」をも採り入れて表現していることが、一見して分かる。このような典故の用い方は、明らかに原典を踏まえようとする意識が積極的に働いていることを示しており、『老子』の語句と表現とをそのままの形で沿襲し、自分なりにその思想に迫ろうとする態度が伺える。そしてこの点に、謝靈運の典故表現運用にかかわる形式面での全般的な特色も認められる。例えば「還旧園作見顔范二中書」詩の、

衛生自有経 生を衛るは自ら経有り

息陰謝所牽 陰を息はせて牽く所を謝せん

の上句が、『莊子』庚桑楚の、

南榮趺曰、願聞衛生之経而已矣。老子曰、衛生之経能抱一乎、能勿失乎、……与物委蛇而同其波。是衛生之経已。

に基づくなど、枚挙にいとまがない。

謝靈運のこのような典故表現の仕方に関し、明の王世懋はその著『芸圃擷餘』で、

古詩は兩漢以来、曹子建出でて始めて宏肆と為り、情態を生ずること多し。此れ一変なり。此より作者、史語を入ること多し。然れども経語を入るる能はず。謝靈運出でて易辞・莊語、用と為さざる所無し。剪裁の妙は、千古に宗たり。又一変なり。

と言ひ、謝靈運の「易辞莊語」を用いた句造りに対し、「剪裁の妙は、千古に宗たり」と好意的に高い評価を与える。「易辞莊語」を「経語」として扱っているが、謝靈運の時代に即して言えば、「三玄」の語であることは言うまでもない。清の沈德潜も『説詩粹語』巻上で、

詩を以て詩に入るるは、最も是れ凡境なり。経・史・諸子、一たび徴引を經、都て詠歌に入れば、方に潢潦・無源の学に別るべし。

と言ひ、その下に「曹子建は善く史を用ひ、謝康樂は善く経を用ひ、少陵は経・史並に用ふ」と自注を施して、このような用典による表現は「潢潦無源の学に別れ」る点で一つの効用があることを述べる。ここの自注の謝康樂（靈運）の「経」も前掲の王世懋の説を承け、「易辞莊語」という「三玄」の語を指すと考えられる。

無論このような典故表現には効罪があり、清の王師韓などはその著『詩学纂聞』中に「謝（靈運）詩累句」と題し、謝詩において句法を成さない句を例示したあと、

其の（謝靈運の）詩は好んで易詞を用ふれども、用ふるや輒ち拙劣なり。『登緑嶂山』詩に云ふ、『壘上貴不事、履二美貞吉』、『湖中瞻眺』詩に云ふ、「解作既何感、升長皆丰容」のごときは、此れ猶ほ其の通順なる者なり。

他の「水流程就湿、火炎同焯燥」『相逢行』、「否桑未易繫、秦茅難重拔」『折楊柳行』、「游至宜便習、兼山貴止託」『富春渚』、「常佩智方誠、媿微富教益」『種桑』〔智方〕は、乃ち易卦の「德方以智」を用ふ。のごときは、拙劣にして強湊ならざるは無し。

と言ひ、列挙した「易詞」の使用は「登永嘉緑嶂山」詩および「於南山往北山經湖中瞻眺」詩に見えるものが「通

順」である以外、他は「拙劣にして強湊」でないものは無いと批判する。この批判は、学派間の持論の相異に起因する面もあるが、元来典故表現の功罪については、『詩品』や『文心雕龍』以来、是非論が絶えない。いずれにしても、謝靈運自身は確かにその使用が多く、したがって依存度も高いという事実は否定できない。またさらに、「山居賦」(『宋書』本伝)にも「仰前哲之遺訓、俯性情之所便。奉微軀以宴息、保自事以乘閑」と言い、それには山居するの  
 が最もよいが、その抛りどころとして、自注に、

易云、向晦入宴息。莊周云、自事其心。此二是其所処。

と、『周易』『莊子』(に見られる語)を挙げる。また同じく「山居賦」自注に、『老子』『莊子』に関して「此二書、最有理」と言い、ともに「聖人之教」であると言明している。これらの発言は、皆詩人の「三玄」に対する深い理解と沈潜度を示す。方東樹も『昭昧詹言』巻五に、

莊子を読んで熟すれば、則ち康樂の発する所は、全て是れ莊の理なることを知る。

と  
 言い、

康樂を看来れば、全て力を一部の莊の理に得。其の此の書に於けるや、用功甚だ深く、兼ねて郭注にも熟す。古人、一部の力を得るの書有れば、一生これを用ひて窮まらざること、尺捶のごときなり。

と指摘する。このことは『莊子』に限らず「三玄」全般に言え、謝靈運がここに表現上の、あるいは思想上の力を得ていたことが認められる。

さて、以上「三玄」について述べてきた形式上の特色を先に述べた『楚辞』と比較すると、「三玄」の場合は『楚辞』の場合のように数句に亘って引用されることはないにしても、やはり原典に密接であるという点は、概ね同方向にあることが分る。ただし両者の違いとして、「三玄」を用いた表現には処世の態度を凝縮して端的に表わし得る語句が多分に含まれるのに対し、『楚辞』を用いた表現にはそれがなく、むしろ抒情的・感傷的な内容を持つ比較的長い句が多い、ということが当然のことながらある。

次に、『楚辞』と「三玄」の内面的な比較をするために、「三玄」の使用の最も多い、またその特色を最もよく備

えるものとして、「登永嘉緑嶂山」詩（『詩紀』卷四十七）を挙げる。この詩もおそらくは永嘉の太守時代の作品と  
思われる。

……

盛上、貴不事、盛上は事へざるを貴び

履二、美貞吉、履二は貞にして吉なるを美とす

幽人常坦歩、幽人は常に坦らかに歩み

高尚逸難匹、高尚なるは逸かにして匹難し

願阿竟何端、願と阿とは竟に何の端かあらん

寂寂寄抱一、寂々として一を抱くに寄す

恬知既已交、恬と知と既已に交はり

繕性自此出、繕性は此より出づ

省略した初めの十二句で、詩人は山水を跋涉し、幽邃をきわめる過程を述べる。そして次に山水の奥いところに立ち、

『周易』の盛卦上九の、

不事王侯、高尚其事。

および履卦九二の、

履道坦坦、幽人貞吉。

をそれぞれ一句四句と二句三句とに分け、ほぼそのまま詠み込む。『周易』の語のこのような用いられ方は、謝靈運の詩一篇中であって、主要な役割を荷っている場合が多い。この盛卦は隠者にかたどられ、王侯に仕えず高潔な生き方を守ることを戒めとする。それは詩人においては、身は俗世に在りながらも、それに煩わされない人物への憧憬より発せられる。これが緑嶂山遊覧の過程から導き出された理であることは言うまでもない。次の履卦も「幽人」は隠者であり、主君に仕えず坦坦と道をふみ行なうあり方をよしとする。謝靈運の詩では、永嘉の太守という役職に縛

られた自分とは異なる、王逸注に言う「謙るを尚ぶ」ことを心得た人物に追従したいとの希求より発せられる。したがって、ここに詠まれた「幽人」「高尚（なる人）」は詩人の景仰する人物の姿であり、また自らの目指す境地とも考えられる。そしてこの四句は、知識として持っていた『周易』の玄理が、山水の幽遠さと相俟って、詩人の脳裏に具現したかの感を呈する。このような表現は『周易』に対する深い理解があつてこそなされる。

最後の四句のうち、「願阿」の意味は詳らかでない。意味の無い助字であるとの説もあるが、黄節氏らの注釈者は『老子』二十章の、

唯之与阿相去幾何。

によるものとする。とすれば、詩の「願」はこの「唯」に通じ、礼儀正しい返答の言葉を言い、「阿」は返対に礼儀を欠いた返答の言葉を言う。我が「はい」と「うん」ほどの意で、いずれの返答も本質上の差は無く、「一」であることを述べる。次の「抱一」は『老子』十章に、

載營魄抱一。

とあるのによる。二十二章にも「抱一」という語はあり、王弼も「一、人之真也」と注するように、人としての「真」——老荘流の道を確乎として守ることを言う。謝靈運の詩では上句を承けて「寄抱一」と言い、『老子』の「抱一」の思想に積極的に意を托そうとする。

結尾の二句はともに『莊子』繕性に基づく。

繕性於俗、学以求復其初、滑欲於俗、思以求致其明。謂之蔽蒙之民。古之治道者、以恬養知。生而無以知為也、謂之以知養恬。知与恬交相養、而和理出其性。

とあるのにより、人為的な知恵でなく、自己の本性に根ざした自然の英知と、その本性を乱さないしずかな心が調和することにより、古人のように真に自己の本性に立ち返ることができる、と述べる。詩人もこの境地に近づこうとする。

以上から大意を捉えると、王侯に事えないことを貴び、ただしさを美とする「幽人」や「高尚」なる人物には匹敵

できないが、「抱一」という老荘流の道に寄れば、生来の英知にしたがって、人間本来のあり方に立ち戻ることができる、というような意味になろうか。つまり、「幽人」や「高尚」なる人物には到底及ぶべくもないが、ただ老荘流の道に寄ることでの心の安らぎを得ようとする。

そこでいま、既述の『楚辞』との関連を改めて考えてみると、老荘流の考え方に向ったと述べておいた『楚辞』による表現内容は、やがてここに行きつくのではないか、と考えられてくる。どれほど我が身を清潔に飾り、「美人」を求めても結局は慰められない。それは「羽人」にしても「幽人」にしても同じこと。ただ老荘流の考え方の中には心の安らぐ言葉がある、という方向を指すことになる。つまり、謝霊運の、『楚辞』による表現は原典特有の憂国の情などは襲わず、専ら『楚辞』中の自然風物——特に香草に托された否定的な感情面にのみ借り、自らの悲哀を述べている。それは高潔なる理想上の人物を思慕する情に添えられながら、結局は満たされることなく、やがては老荘流の考え方に重点が置かれるようになる。このような内容を持つことが言えると思う。

#### 四

最後に、謝霊運が『楚辞』の内容をどのように見ていたのかを、追って考えてみたいのであるが、残念ながら管見の及ぶ限りでは、彼の詩文中にその点に触れた発言は見出せない。わずかに「道路憶山中」詩（『文選』卷二十六）などに屈原に対する共感が述べられる程度にとどまる。

采菱調易急 采菱 調べは急なり易く

江南歌不緩 江南 歌は緩やかならず

楚人心昔絶 楚人 心は昔に絶え

越客腸今断 越客 腸は今に断たる

断絶雖殊念 断と絶とは念ひを殊にすと雖も

俱為帰慮款 俱に帰慮に款たかれぬ

存郷爾思積 郷を存おもひて爾の思ひは積り

憶山我憤懣 山を憶ひて我れ憤り懣ゆ

……

……

この詩は、詩人の晩年、棄市の刑にあう前年の四十八歳、臨川内史として赴任する時の作とされる。詩に言う「楚人」は李善によれば屈原であり、「越客」は謝靈運を指す。自分と屈原とを比較対照しながら、特に五句・六句目に「断絶雖殊念、俱為帰慮款」とあるように、屈原と自分とは常の思いを別箇のものとするが、双方とも「帰慮」にさいなまれた、と言う。ここに彼此れ信念を別にしつつも、「帰慮」という一感情面での一致点を見出している。具体的には屈原は「郷」——祖国を憂い、謝靈運は「山」へ隠棲しようと思うという、両者別々の念いをいだいていながら、帰るべき所に帰りたい気持ちと同じという、感情面での共感が見られる。この共感からは『楚辞』を憂国の文学と見ていながら、専らその抒情的、感傷的な面のみ追従しようとする詩人の態度が窺える。換言すれば『楚辞』以外に自分の悲哀を托せる表現がなかった、ということなのかも知れない。と同時に、ここには詩題にも明示されるように、「山中を憶ふ」方へ心が向き、やはり行き着くところは老荘の考え方であろうことが、示されてもいる。

### 注

①『文選』所載の詩の出典は李善注による。ただし、後出の謝靈運詩の中には、黄節氏『謝康楽詩注』、葉笑雪氏『謝靈運詩選』などの施注を参照したところもある。

②『評注昭明文選』に孫月峰は、全体は「浅調」であるが、「日風」の二語だけは「佳」と言い、『昭昧詹言』にも方東樹は『日華川上動』の二句は、千古に新たなるがごとし」と言う。評者は主としてその清新な表現を評価する。

③小尾郊一氏『中国文学に現われた自然と自然観』『賞』の意

味するもの」参照。

④高木正一氏『謝靈運の詩風についての一考察』（『立命館文学』180所収）参照。

⑤王逸『楚辞章句』遠遊序にも、この篇が「配托仙人」するものであると言う。

⑥謝靈運の老荘思想については、福永光司氏『謝靈運の思想』（『東方宗教』13・14所収）に詳しい。

⑦『謝康楽詩注』の「富春渚」詩「洊至宜便習、兼山貴止託」句注に、黄節氏は「吳伯其曰く」として、「人知靈運用易語

造詩詞、不知靈運用易義立詩格。如此詩借未濟富春已前、喻冒險而行、須重坎之義、曰洊至宜便習、既濟富春以後、喻於止知止、又須重艮之義、曰兼山貴止託。此最善於易者。(人は靈運の『易』の語を用ひて詩詞を造るを知るも、靈運の『易』の義を用ひて詩格を立つるを知らず。此の詩の如きは未だ富春を濟らざる已前を借りて、險を冒して行くに喩へ、重『坎』の義を須ひて、『洊至宜便習』と曰ひ、既に富春を濟りて以後を、止まるを知るに止まるに喩へ、又、重『艮』の義を須ひて、『兼山貴止託』と曰ふ。此れ最も『易』を善くする者なり。)という評を載せる。